



SHUSHO AKIMOTO
Mitsubishi UFJ International

“予備軍” たちの 焦り

一人暮らしの高齢者だけでなく、結婚を前にした20~30代、はたまたおひとりさまライフを満喫するシングル族などなど……。あらゆる世代に「無縁」の不安はつきまとう。

生まれる」と、もうひとつの住まい方推進協議会の幹事、辻利夫氏は言う。

そんな未来を変えようと、新しい住み方を模索する動きが起きている。実情を追ってみた。

一人暮らしの孤独を癒やすシェア住居

オートロック付きのワンルームマンションがもてはやされたのはバブルの頃。だが晩婚化が進み、従来の賃貸住宅に不安や孤独を感じる若者が増えている。彼らが注目しているのがシェア住居だ。

この業界に詳しいひつじ不動産の調べによると(09年12月現在、首都圏だけで少なくとも約1万人が

暮らしの孤独を回避 「仲間と住む」という生き方

一人暮らしに孤独や不安を感じる人びとが増えている。そんななか、広がっているのがシェア住居やコレクティブハウスなどの新しい住居。入居者が絆を深め合う。21世紀の長屋を訪ねた。

野田亮さん(仮名・69歳)は30代で離婚。団地で一人暮らしをしてきた。

「ある日、窓から外を見下ろしたらベランダに老人がぼつんと腰かけていた。それを見て、こりやたまらんなあ、と思った。誰からも当てにされず、会話のない暮らしをしていたら人間が狂っていく」

快適なはずの住居に住む人を社

会から隔離する。極、と化している。高齢化が進む団地ばかりではない。郊外の一戸建てやマンションの実態も深刻だ。

戦

後、国が進進してきた持ち家政策により、日本人は「住まいのはし」を上り続けてきた。借家から持ち家へ。マンションから一戸建てへ。その結果、人びとはより広く、プライバシー

性が高い住居に住めるようになった。だが皮肉なことに、地域とのつながりは希薄化、孤立する高齢者が増えている。

一方、晩婚化や離婚の増加などで、単身者はますます急増中だ。2005年の単身者世帯は1446万。国立社会保障・人口問題研究所の推計によれば、20年後には、1824万世帯に増える見込みである。

一収入の独身女性や非正規労働者は老後も十分な年金がもらえず、貧困化する可能性がある。彼らの将来はどのようなのか。今の住居事情のままではそれこそ大量の無縁死が



ソーシャルアパートメント恵比寿のリビングルームの一角。ボードには入居者のプロフィールが貼られている

急速に増えている

シェア住居の推移



シェア住居生活を選んでいる。シェア住居の最大の特徴は、それぞれの専用スペース以外に、トイレやシャワー、キッチン、リビング、洗濯室など共用スペースがあること。業者側からすれば、専用スペースの水回りコストがかからないため、全体の建築費用が低く抑えられる。そのぶん家賃を下げることもできれば、共用部分に設備投資することも可能だ。

家賃2万円台の格安物件から、ブルーバリーやヨガスタジオなどテラックスな設備のある十数万円の物件までタイプはさまざま。礼金

や仲介料ももらえない。代わりにデポジットと呼ばれる保証金を支払う。これは退去時に返却される場合が多い。

利 点はそれだけではない。共用部分を一緒に利用することで、入居者同士、交流が生まれやすくなるのだ。

「将来、結婚するつもりはないが、一人暮らしは寂しくていやだ」と打ち明けるのは、IT系企業を営む25歳の男性だ。恵比寿ガールズデンパリスからは近い、ソーシャリティアパートメント恵比寿（東京都目黒区）に住んでいる。

リビングの大壁液晶テレビとい、屋上バルコニーといい、通常の賃貸マンションではありえない豪華さが特徴。リビングは地下にあり、人に会いたくないときは玄関から個室に直行できる。

「専用のSNS（ソーシャルネットワークワーキングサービス）やブログを設けるなど、コミュニティづくりを促す工夫もしています。年齢別は20〜40代まで幅広く、国籍も多様。職場では得られない人脈をつくれると好評です。ビジネスもアップテンクが生まれるケースもあります」（山崎剛一、グローバルエージェンシー代表取締役）

「住居だ。東京都北区にあるロマン亭の入居者は20〜30代の8人の女性。職業はメーカー事務職、看護職、ブティック店員などさまざまだ。

女性同士、安心して暮らせるばかりではない。ここでは、空間だけでなく食料なども共有し、全員が節約生活を選んでいる。

「夕食やお弁当の下ごしらえは、毎週末の楽しい共同イベントです。コメ、しょうゆ、みりんは共同購入。田舎から送られてきた野菜も果物も分け合う。食費は安くですよ。1週間で2,000円くらいかな」と24歳のメーカー社員。

家賃は12平方メートルで月9万5,000円と、シェア住居の中では決して安くはないが、09年4月のオープン以来、ほぼ満室状態が続いているという。

日々の食材まで共有する生活

女性を助う犯罪が多発する昨今、一人暮らしに不安を感じる人も少なくない。そこで増えているのが、女性限定のシェア

住居だ。東京都北区にあるロマン亭の入居者は20〜30代の8人の女性。職業はメーカー事務職、看護職、ブティック店員などさまざまだ。

「水道光熱費を通常の70%くらいに抑えている。全員の希望により、余ったおカネでエコ家電を購入しました」（丹田和彦、オフィス・シントウ代表）。

金融機関に勤務する女性（31歳）は「環境のことを考えれば昔がそれぞれキッチンやシャワーを持つ必要があるのか疑問。共用すれば他人をおもいづかなくていいに使うようになる」。

女性の賃金は伸び悩んでいるのが現実だが、こうしたシェア住居なら、協力して生活費を抑え、働き続けることも可能だ。低コストでも入居者同士協力し、ていねい



ロマン亭の夕食。食卓には皆で作った大根節と豚汁、カボチャの煮物が並ぶ。「食事は野菜中心、やめました」



「おかげで外食が減り人も温めて食べられる」とお礼を言っている。コレクティブハウス「エコー」の夕食タイム。男性が調理するおともいれ

に暮らすことで、生活は奥深く楽しいものになる。『経済世代』『エコー世代』などと呼ばれる若者にとってシェア住居の合理的な暮らし方はびびりなのだ。

とはいえ、丹田氏はシェア住居の急増に伴う弊害も懸念する。「ずさんな建設、管理を行う業者も出てくるのでは。入居者は正確な情報を収集し、よく物件を見極めてほしい」。

孤立させない 緩やかなコミュニティ

ビールで乾杯するおともいれは、叱られて大泣きする男の子も。賃貸住宅「コレクティブハウス型」(東京都多摩市)の食事風景はじつににぎやかだ。

ここでは週3回、希望者が一緒

に食事をする。なんと1食400円。調理は持ち回りで分担するが、取材で訪れた日は男性3人が担当していた。メインのおかずはマグロの竜田揚げだ。「独身の人も仲間とわいわい食事ができます。もちろん自宅に持ち帰って食べるのも自由」とNPOコレクティブハウジング社の狩野三枝理事。

一人でいたときは自室で、誰かと一緒にいたければ共用スペースで過ごす。それが北欧発の住居「コレクティブハウス」の魅力だ。キッチン・トイレ・バス付きの独立住戸と、共用のキッチン、リビングダイニングなどを備えている。ハウスの現在は、31・69歳の単身者や家族が暮らす。ユニークなのは調理のほか共用スペースの掃除、菜園の手入れなど

を、各自のペースに合わせ分担していること。家事を一緒にするうち、「頼りにされたり頼ったり」という「近所精神」が生まれるという。

ただし、共同生活にはライフスタイルの違いからくる摩擦もつきものだ。そこで毎月、定例会を開き、問題があれば話し合う。

隣人とうまく距離を取るスキルも快適に暮らすうえでは大切。親子喧嘩して共用スペースに。家出。してきた子がいれば、周囲は見守りつつもそっとしておく。

「孤独」を尊重しながらも、孤立させない人付き合いの知恵が、ここには生きている。

冒頭の野田さんも、居住者の一人だ。地縁とも血縁とも違う。「暮らし縁」を求めて入居した。嘱託勤務先を引退後、月15万円の年金で住み続けられるかというかわからなかった。「今はこの貴重な暮らしを楽しみたい」と語る。

建設関連会社勤務の佐藤智樹さん(仮名・32歳)は独身。「入社以来、給食はほとんど上がっていない。特米、妻子を養えるか不安。結婚後もここで暮らせる

といのですが」。

前出の辻氏は指摘する。「単身者や若い家族が安心して住める新しい住居の需要は大きい。国や自治体の取り組みは期待したい。とはいえまだ数は多くない。出資者に減税するなど国の後押しが必要だ。また、昨年3月に起こった、高齢者施設「たまゆら」の火災事故の例もある。今後、さまざまな私たちの住居が増えれば、質のチェック機能も求められるようになる」。

コレクティブハウスをはじめとする。現代の長屋。

は、無縁社会における新たなセーフティネットになりうる。取り組みは始まったばかりだが、人びとが寄せる期待は熱い。

庭の手入れ。料理や掃除など共同作業は、一見暮らしの奥深い楽しみを生み出す

